

27. 埴輪に見る琴の 三種の構造

昭和52年10月刊行の『月刊文化財』に、友人・兼康保明君の「古代の琴—森浜遺跡などの遺品をめぐって—」と題する重要な古代の琴の発掘された実例の紹介を近江の諸例を中心にお願ひし、また私自身も、その周辺を描くつもりで「埴輪弾琴像幻想」の小論を附けた。その際、兼康君が、一枚板からなる琴と構造琴の存在が古墳時代中期には見られたのではないかと述べている言葉につよく惹かれて今日に至った。彼は滋賀県守山市服部遺跡の実際の本琴の例から後者の構造琴をとくのである。しかし、彼自身の筆では明白にその機能が説かれていないが、恐らくこの孔は元来は側板をとじ合わせるための機能をもったものであり、一種の構造琴というか共鳴のための一種の構造とみなすべきものではないかと私はひそかに考えて来たのである。

ところで、従前、知られていた埴輪弾琴像の膝の上ですえられたそうした琴は、すべて一枚板の琴であった。それだけにそうした私の想いは中々に確定できず今日に至ったのである。埴輪弾琴像には、二種の像容がある。一は、脚を全て表現しない埼玉県大里郡川本町舟山古墳発見例のような資料や、千葉県・殿部舟山古墳発見例のように、組み合せた粗い作りの脚、前かがみの弾琴像の一群である。この種の脚の表現の弱いものは、いずれも腰に太刀を帯びたすばらしいものではあるが円形の台座に坐り、椅座しない特色をもつ。それだけではなく、膝にする琴は琴頭と琴尾を幅広くし、中央のくびれる形態をとり、五櫛を設け四切込を作り出し、くびれた部分、換言すれば、ゆるやかな弧をつくる琴頭から三分の一ばかり入ったところから弦を出し、その弦数は四弦五櫛というものであった。しかも両埴輪像にともに共通してみられる事実は琴頭を左、琴尾を右にすることであり、琴の用い方までも明らかにしているのである。

ところが、いま一種の像容がみられる。それは、両脚の膝をそろえて垂下し足台にのせる整正な一群の埴輪像である。著名な群馬県前橋市朝倉発見例や現在所在は不明であるが後藤守一先生が早く写真を掲げられ、相川氏も作図をのこしておられる群馬県佐波郡剛志村

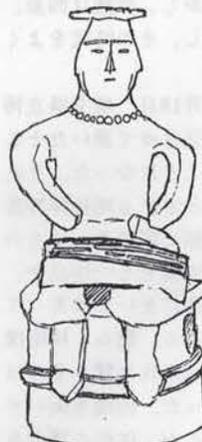
(現在、境町)発見の弾琴像などは、先の像容とは異なり脚結いした両脚をととのえて脚座にのせるだけでなく、椅座するようであり、太刀を帯びるなど他は先の一類と共通する一面をもつものの一格、格の高さを暗示しているものなのである。この種の像容の琴の大きな特色は弦の表現にある。すなわち、脚の表現を省略したり簡便化した一群=椅座せず円座に坐する一群



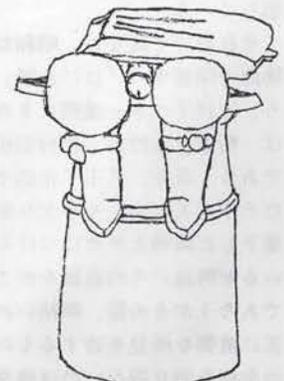
舟山



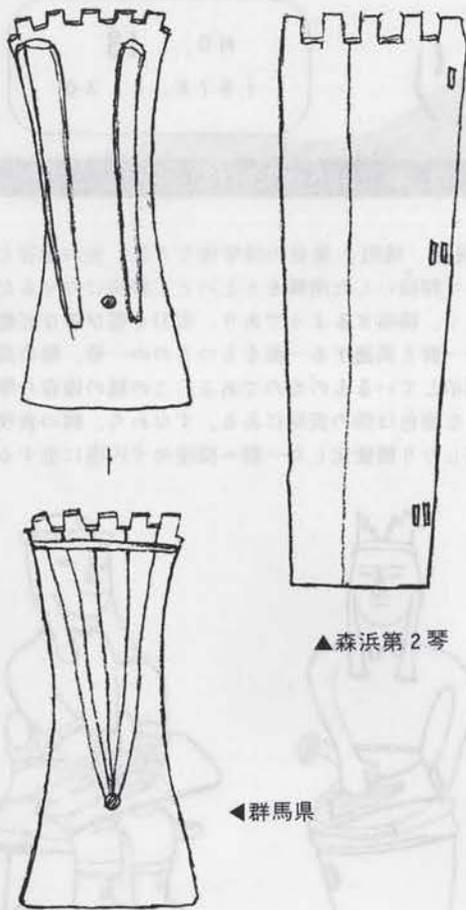
朝倉



羽田



剛志



▲森浜第2琴

◀群馬県

は弦をへら描きするのに対し、この種の脚結いの両脚をそろえ脚座に垂げた一群は弦をすべて粘土紐のはりつけで表現している点にある。しかし、弦数は四条、五櫛をもつ点は、先の諸例と共通し、その時代をよく示している。

それだけではない。昭和53年3月18日、埼玉県立博物館で開催中の「はにお展」を拝見させて頂いたところ、注目すべき一遺例にまみえることになった。それは、栃木県佐野市大和村羽田発見とされる埴輪弾琴像である。現在、八王子市郷土資料館に保管されるものだそうであるが、やや太り気味の体軀をもつ作品で、垂下した両脚とタガにつけられた脚台をいまは失っているが明確にその痕跡をのこしている。恐らく椅座像であろうがその膝、脚結いの上におかれた琴、それは正に重要な所見を齎するものであった。両端を失いその全長を知り得ないのは残念であるが、従前の琴より大きく脚結いた膝と琴面までの間に、かなり高い側

板の存在が明確にみられるのである。展示ケースの左右を動いて拝見したところでは前面だけではなく、腹に接する部分や底にも側板、底板がみられるのであり、琴面と脚の間に空間があり、構造琴というか共鳴箱（槽）を具えた琴そのものであることを知ったのである。滋賀県守山市服部遺跡の方形周溝墓の周溝に流入していた共鳴箱（槽）をもつ琴と共通し、そうした琴を粘土で作りまさに坐した人物埴輪像の膝上にすえつけた、そうした姿そのものである。

栃木県佐野市大和村羽田のこの埴輪弾琴像は、まさに日本の楽器史の重要な一頁を占める。従前の琴頭、琴尾を幅広くするといった形をとらず、服部遺跡の実際の木製の琴と同様、櫛の方へひろがる直線的な構造琴なのである。こうした資料を得て、古墳時代、二種の琴——一枚板琴・共鳴箱（槽）琴——が息づいたことを知りえたので、さらに従前から報告されていた埴輪弾琴像を検討したところ、椅座弾琴像として著名な先述の群馬県佐波郡剛志村（現在・境町）発見とされる一像も共通するものであろうことを知った。今、この埴輪像はその現物が失なわれているため確認しえないものの、写真からするかぎり琴は琴の両端の割れ方が全く先の佐野市の共鳴箱を具える琴例と酷似し、中が空間になっているらしいこと、手前と奥に側板、底に底板があり、やはり四弦を粘土紐で表現するなどの諸事実が知られ、共鳴箱（槽）を具えた構造琴を示すものとしても重要なものであることを知りえたのである。この像は脚結いの両脚の間、琴の下に男性のシンボルを作り出したものとしてもその性格を常に問われるものであるが、いま一つの新しい所見を私達に提示したのである。

兼康保明君の説いた古墳時代中期の琴にみられる二種の構造は、六世紀代の埴輪弾琴像の中にも見事に生きていることが、ここに窺われるに至ったのである。円座に坐し、脚を表現しなかったり簡略に組合せた像容の場合は、琴頭、琴尾をひろくし、四弦をへらで線描きした一枚板の琴であるのに対し、椅座したり、脚結いの両脚を垂下する整正な像の場合は、必ず琴の弦を粘土紐で表現し、中には一枚板例もみられるが共鳴箱（槽）をそなえたすぐれた構造琴が多く息づいたことを教えているのである。琴一つをとり上げても、「政治」は琴そのものの形態と密接に結びついている。しかし、なお「政治」を考えるとすべての埴輪琴が四弦であり琴尾を左にする事実、男子像のみ生きることはその時代の「時代の杵」を示すものとして十分くみとらねばならない事実であろう。

なお一言、附言が許されるとするならば、兼康保明君の報じられた森浜遺跡の第二、三号琴の側面の方孔が三ヶ所に見られる事実は、群馬県発見を伝える一

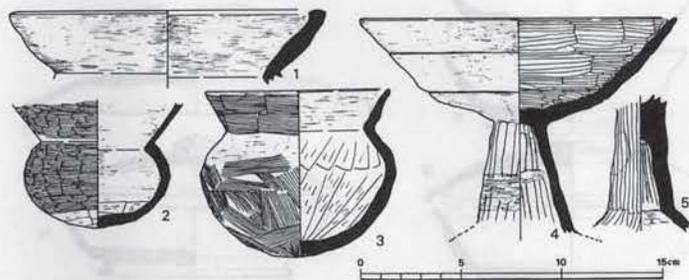
埴輪琴例を挙げることによって解釈がつくのではないかと考えられる。この埴輪琴は、五櫛四切込みという点では他の諸例と同様であるが、線刻されて珍しくも五弦が表現され、四弦は櫛間の四つの切込みにとじられ一弦のみが切込みとは関係なく表現され、櫛の先に弦とは直角に突帯の粘土紐を一条つけており注目されるが、さらに興味をひくのは琴の裏面の構造である。一側に添って側板とは言えないが弦孔からはじまり琴末に至るに従い次第に高さをます板材がとりつけられ、他の側縁にもやや内よせで同様の板材がつけられ、一見琴脚というか、安定をはかる装置が設けられている。こうした琴脚とでもいうべき側板材をとりつけるものとして、森浜遺跡の二つの琴の三孔が生きているのではないかと考えるのである。こうした琴の板脚をとりつけた例を含めるならば、一枚板板材の琴、両側に板脚をつけ安定と共鳴をはかった琴、共鳴槽をそなえた構造琴の三種が存在していたのではないかと考えられるのである。(S53. 3. 19稿了 水野正好)

28. 穴太遺跡出土の 古式土師器

国道 161号線バイパス(西大津バイパス)の建設に先立ち昭和51年10月から翌52年3月にわたって穴太遺跡(大津市坂本穴太町所在)の試掘調査が3地点において行なわれた。

その結果、古墳時代初頭から平安時代にわたる遺物・遺構等が多数検出された。なかでも一番東側に位置するC地点においては、白鳳時代の瓦窯跡が検出され、さらにその瓦窯跡の周辺からは、多数の土器、とりわけ古墳時代前期に比定できるとされる完形に近い土器が、いくらか出土したので、それらの土器をここに紹介しておきたい。

甕(1) 口縁部は、体部から大きく屈曲し、内彎して外方に開き、口縁上端部に面をつくり内面を肥厚させる。口縁部はナデを施す。体部は球形になると思われる。



穴太遺跡出土土器

小型丸底壺(2・3) 2は、口縁部をわずかに内彎させ外上方に大きく開く。体部は扁球形で最大腹径 7.2cmを測り、体部中央よりもやや上方に位置する。口縁部は、体部の最大径よりも大きくなる。体部外面は、ヘラ削りした後にていねいなヘラ研磨、内面はヘラ削りを施す。3は、口縁部をわずかに屈曲させ外上方に開き、端部は丸くおさめる。体部は、わずかに肩の張った扁球形であり、最大腹径 9.7cmを測り、体部中央よりやや上方に位置し、口縁径よりも大きい。外面は刷毛目を、内面にはヘラ削りを施している。

高坏(4・5) 4は、坏部の底部と口縁部の境界は明瞭でなく、口縁部をわずかに外反させ、ゆるく外上方にひろがる。脚部は、柱状部がまっすぐにのび、裾部は、屈曲して大きくひろがる。坏部外面には、粘土の接合跡が明瞭に残る。坏部外面はナデを、内面は横方向の細かいヘラ研磨を、脚部外面は縦方向のヘラ削りを施しており、脚部内面にはしぼりの痕が残る。5は、細長い脚柱状部に屈曲して大きくひろがる裾部がつく、外面は縦方向のヘラ削りを施しており、内面にはしぼりの痕が残る。

以上が、紹介土器の簡単な説明である。これらの土器は、奈良県上ノ井手遺跡(註1)、大阪府船橋遺跡(註2)出土の土器と類似した形態、手法などの諸特徴を持っており、布留式土器の範囲に含まれよう。

さて、ここで、当穴太地区の歴史的景観をながめてみると、遺跡西方の丘陵には、総数百余基の古墳群、遺跡西部には、伝高穴總宮跡、南部には、穴太廃寺跡(註3)が、また、大津宮時代の溝跡(註4)などが存在する。しかしながら、前述した土器と同時期の遺構は、調査の関係もあって、いまだに見い出されていない。しかし、これらの土器と併行する時期の土器が、当遺跡の南に位置する湖西線敷地内IV区(註5)において多数検出されており、それらを伴った竪穴住居址・方形周溝墓なども、また、多数検出されている。

これらの遺構は、すべて山麓から湖岸に向って舌状にのびる扇状地上に営まれている(註6)。また、ここに紹介した土器の出土地点も扇状地上に位置している。

さらには、穴太遺跡においても、C地点から約 300m南に位置するB地点からは、古墳時代初頭に比定できる方形周溝墓が検出されている。これらの要素を考え合わせると、土器出土地点に近接する位置への、布留式土器併行期に造り営まれた遺構の存在を推測することは、許されるであろう。

なお、現在、遺物の整理が行なわれており、詳細は、後日に期待したい。

註1 安達厚三・木下正史「飛鳥地域

の古式土師器」(『考古学雑誌第60巻第2号』1974年)
註2 田辺昭三編(『船橋II』平安学園考古学クラブ
1961年)

註3 佐藤宗諄他「穴太下大門遺跡」(『大津市文化
財調査報告書』(3)大津市教育委員会 1975年)

註4・5・6 田辺昭三編(『湖西線関係調査報告書』
滋賀県教育委員会 1975年) (須崎 雪博)

29. 大津市内出土の 白鳳期の須恵器

近年、大津市内における大津宮時代を中心とした白鳳期の遺跡の発見は注目に値する。そこで、今回新しく得られた資料のなかから、白鳳期に相当する須恵器を出土する遺跡を、簡単ではあるが紹介したい。

源内峠遺跡(1・2) 昭和52年度の調査において、製鉄所の窯の本体と推定される焼土や多量の鉄滓、炭化物とともに、工房跡らしき柱穴などが検出され、その遺構面から出土した土器である(註1)。

北大津遺跡(3・4) 弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。この遺跡からは、南北にのびる大溝より大津宮時代の木簡に混じて、多数の一括土器が出土した。詳細は現在整理中のためいずれ明らかにされると思われる。なお、大溝は大津宮時代の条里にあった溝と考えられている(註2)。

錦織遺跡(5・6) 大津宮の中心的建物が存在すると考えられている遺跡である。5は、昭和50年度大津市教委の皇子が丘の調査により出土した土器である。当地区からは一辺1.1~1.5mの方形柱穴の南北にのびる掘立柱建物が発見された(註3)。6は、昭和52年度県教委の錦織一丁目の調査により出土した。当地区からは倉跡状建物が2棟検出された(註4)。

檀木原遺跡(7~9) 昭和49・52年度の調査において出土した土器である。これらは、複弁八葉軒丸瓦・蓮華文方形軒瓦などを包含する灰原や工房跡近く

から出土し、瓦窯・工房跡などは南滋賀廃寺に伴うものであることが確認された(註5)。

穴太遺跡(10・11) 昭和51年度の調査により瓦窯が検出され、その灰原から単弁八葉軒丸瓦・方形平瓦とともに出土した土器である。その下層からは、立ち上りの終末期を示す坏身などが出土している。この遺跡は、近くに大津宮時代の構造物の存在を提示する重要な遺跡である(註6)。

湖西線ⅡH区(12) 大津市際川付近に位置し、遺構は存在しなかったが、包含層より、大津宮時代を前後する一括土器が出土した(註7)。

湖西線ⅤD区(13・14) 唐崎駅付近に幅4m、深1.2mの東西にのびる大溝が検出され、溝内より大津宮時代を中心とする多量の土器が出土した(註8)。

以上、大津市内8ヶ所の土器出土地点を列記した。これら遺跡の中には、同時期の他の遺物を完形品かそれに近い状態で伴出する遺跡もあるが、建築遺構の遺存するところでは、遺物の出土状況は決して良好といえない。ただ、これら同一時期の土器の分布は、各遺跡が同一時期に存在した結果とも受けとめられ、その地理的關係から、この地域に大津宮が営まれた時、宮とその周辺における構造物の所在および分布を知ることができる。しかしながら、単に一時期の土器のみを取りあげて、宮や官大寺の創建年代や実年代を安易に論じることがはさけない。今後、これを契機に周辺地域の調査をまって、他の遺物などとも考え合わせ、これらの問題の解決をはかっていきたい。(葛野泰樹)

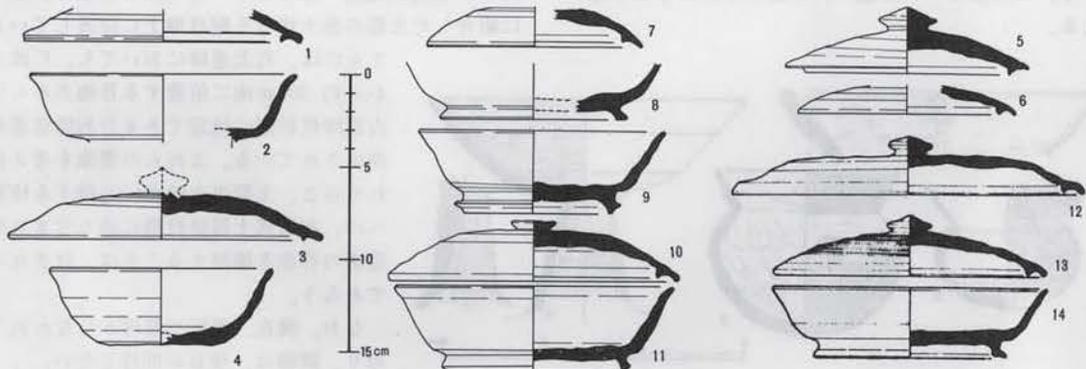
註1 滋賀県教育委員会近藤滋氏の御教示による。

註2・4・6 滋賀県教育委員会提供

註3 松浦俊和「大津宮関連遺跡」(『大津市文化財調査報告書』6 大津市教育委員会 昭和51年)

註5 滋賀県教育委員会『檀木原遺跡発掘調査報告一南滋賀廃寺瓦窯一』(昭和50年)

註7・8 滋賀県教育委員会『湖西線関係遺跡調査報告書』(昭和48年)



大津市内出土の白鳳期の須恵器